Okinawa Open Days 2019 速報 【Day1】

「世の中を変えるオープンテクノロジーとアイデアの集結」をキーコンセプトに、ICT 技術やデータ活用の最新動向に迫る「Okinawa Open Days 2019」（以下、沖縄オープンデイズ）が、2019 年 12 月 9 日（月）からの 4 日間、那覇市の沖縄県市町村自治会館で開催されました。

写真 1　ドアの向こうには最新テクノロジーが目白押し

写真 2　受付をすませたらお好みのプログラムへ

7 回めを迎える今年のテーマは、「沖縄発！データ主導の産業イノベーション」「データ活用を支える ICT 技術（IoT、AI など）」「5G でなにが変わるのか?：TechDeepDive & UseCase」の 3 つ。いま非常にホットなこれらキーワードの真の姿をさぐろうと、1,000 人を超える人々がこの会場につどいました。

― “ 沖縄 × ICT ” がいま注目されるワケ

いま沖縄と聞くと「青い海、澄みわたる空、豊かな自然」といったイメージがふくらみますが、15 世紀ころ琉球国の時代には、その地の利を生かし、当時の日本国、明国、朝鮮国などと盛んに交易を行う海洋国家として名を知られていました。

その万国津梁（世界を結ぶ架け橋）の精神に立ち戻り、アジア太平洋地域と日本をつなぐ ICT 技術の架け橋となることを目指して、沖縄県は 2012 年に「おきなわ Smart Hub 構想」をまとめます。

そして、それに基づき ICT 産業の誘致と育成を積極的に進めてきた結果、この南国の楽園に ICT 技術の集積する拠点が生まれ育ち、いま沖縄の新たな魅力として注目されるようになったという訳です。

ー 初日午後は Kubernetes 開発者の卵が大集合

例年、沖縄オープンデイズの初日プログラムは午後からスタートします。これは日本各地から多くの方に参加してもらいたいと考えてのことです。たとえば、東京や大阪から朝 8 時台の飛行機に乗れば、十分に間に合うよう時間が設定されています。

この日は 13:00 から「Kubernetes アップストリームトレーニング」と「沖縄県観光 2 時交通オープンデータハッカソン」の 2 つのプログラムが行われました。

前者の Kubernetes（読み：くーばねてぃす）は、サーバ内で動作するコンテナ（サービスプログラムとその実行環境をパッケージにしたもの）の起動や停止、負荷に応じた増減、不具合時の自動代替などの機能を備えた、コンテナオーケストレーションシステムです。アップストリームトレーニングとは、その開発に携わる人（コントリビュータ）を育てるためのトレーニングを指します。

写真 3　講師の稲生氏、武藤氏、豊田氏、伊藤氏（左から）

写真 4　真剣な面持ちでハンズオンに取り組む参加者

講師を務めたのは、稲生章人氏、武藤周氏、豊田康平氏、そして伊藤慎悟氏（いずれも NEC ソリューションイノベータ株式会社）です。この方々が、今年、米国サンディエゴで行われた Kubernetes コントリビュータサミットで発表された最新情報を基に、Kubernetes コミュニティでの開発に求められる、基礎知識、開発環境、具体的な実践方法を伝授しました。その後、参加者は自らの手で Kubernetes 開発を体験するハンズオンに挑み、各自が持参した PC を使って、開発に参加する手順やそのポイントを確認しました。

ー 自分たちで作る！会場ネットワーク構築の新たな試み

沖縄オープンデイズでは、各プログラムが開催されるホールや会議室に無線 LAN でのイン

ターネット接続サービスを提供し、来場者の情報収集やコミュニケーションを支えています。また講演者や展示者も、有線 LAN あるいは無線 LAN を通じてインターネット接続を利用します。その規模は、延べ 1,000 ユーザ、2 フロア、8 部屋におよびます。

この会場ネットワークについて、今回、新しいチャレンジが行われました。それは、会場ネットワークの要件定義（ネットワークの機能や規模の策定）、設計、ホットステージ（本番に近い環境での検証）、構築、そして実際の運営に至る一連の工程を、沖縄オープンデイズに携わる者が自らの手で行うというものです。

写真 5　熱い議論が続くネットワークオペレーションセンタ

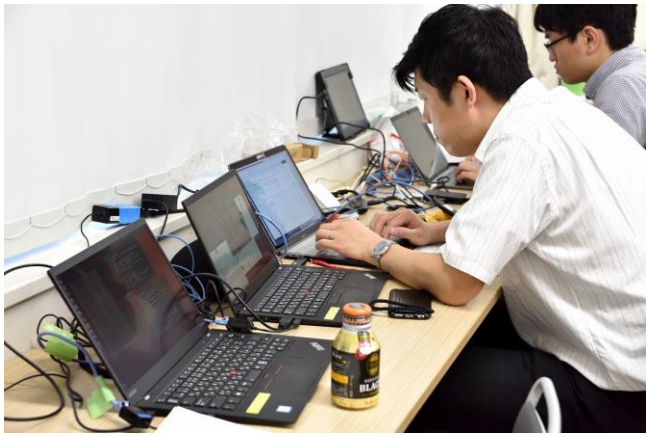

写真 6　ネットワークの最終調整は深夜まで続く

沖縄オープンデイズ主催者の一般社団法人 沖縄オープンラボラトリ（以下、OOL）と、一般社団法人 高度 IT アーキテクト育成協議会（以下、AITAC）の合同で行うこのプロジェクト。設計運営チームをとりまとめ、プロジェクトマネージャとして采配をとるのは、若きエンジニアの小川亮氏（NTT コミュニケーションズ株式会社）です。小川氏は、AITAC の「高度 IT アーキテクト人材育成プログラム」での最終段階（STEP3）課題としてこの大役に挑みます。

この日、同氏を中心にプロジェクトメンバ 18 名が力を合わせ、会場ネットワークが想定したとおりの機能と性能を発揮するよう最終調整に余念がない様子でした。

Okinawa Open Days 2019 速報 【Day2】

沖縄オープンデイズ 2 日めは、朝から終日のプログラムが組まれています。なかでも人気なのは「SDN/クラウドプログラムコンテスト 2019」（午前と午後）と「BoF」（夜）。そのほかに「OpenStack OpsMeetup」（午前と午後）と「沖縄県観光 2 次交通オープンデータハッカソン」（午前と午後）も予定されています。

– 持てる力を完全発揮！ SDN/クラウドプログラムコンテスト 2019

SDN/クラウドプログラムコンテストは、学生や若手エンジニアを対象にして、SDN/クラウド技術を利用したイノベーティブなアイディアと実装を競い合うコンテストです。

数名でのグループ参加が推奨される本コンテストは、例年 10 月ころ国内外に向けて一般公募が行われます。また OOL が実施する「スペシャリスト育成プログラム」の必須課程の 1 つに位置づけられていて、同プログラム参加者も本コンテストにエントリすることになっています。

写真 1　審査員や来場者が見つめるなか発表に挑む参加者たち

写真 2　コンテスト表彰式のあと全員でパチリ

審査は、テーマの新規性/独創性/有用性、実装の完成度/難易度、発表資料のでき映え/オーラルなどの観点から、審査委員により行われます。そこに、当日の来場者の評価が加味されて、コンテストの最終的な順位が決まります。例年、順位に応じた豪華な副賞がスポンサー企業などから提供され、それも参加者の楽しみのひとつになっています。

今年は全 12 チームの発表が終わった後、ただちに審査委員による審査が行われ、すみやかにその結果が発表されました。グランプリ以下、順位はつぎのようになりました。

順位	テーマ	チーム名	メンバ
1	観光客の観光体験をビジュアル化しお土産をつくる「SAKURA STAMP」の開発	JEC seeds	旭 和佳、チャン トゥ ハン、沖 玲穏（日本電子専門学校）
2	社員の栄養バランス、社員食堂の残食を可視化し自然環境を整える「For Green」の開発	Innovative JECreators	安藤 愛菜、ティハ トーン ナイン、金 東鉉（日本電子専門学校）
3	寮生を救う Wi-Fi メッシュネットワーク Messiah-Net	Udon_Internet	小松 聖矢（香川高等専門学校）、竹原 一駿（香川大学）、宮川 慎也（名古屋大学 大学院）
4	Kubernetes によるコンテナ貸出サービスの提供	DigDog	上地 悠斗、髙瀬 大空、秋田 海人（琉球大学）
5	最適な環境で勉強ができるシステム	九産好いとーよ	河本 碧生、木村 智仁、谷口 佳誉（九州産業大学）
6	初心者のゲーム開発者等が手軽に無料でマルチプレイの実装をできるようにする	MAT_Nodes	朝倉 匠、宮平 賢、玉城 賢勝（琉球大学）
7	Li-Fi と SDN 技術を組み合わせた動的経路切り替えシステム	ネットワークデザイン	戸巻 潤也（明治大学 大学院）
8	Li-Fi と SDN を用いた動的ルーティング技術	加藤	堀口 敦士（明治大学 大学院）
9	船の欠航予測を確率で表示するシステム	TOM_thon	玉城 翔平、大城 紳之亮、森 健汰（琉球大学）
10	駐車場経路検索アプリ	アベンジャーズ	渡久平 圭祐、仲宗根 航（琉球大学）
11	NFV-enabled Network Slicing for IoT	NCTU CWT	Ting-An Tsai、Zhao-Ru Chen（台湾国立交通大学）
12	おじいちゃんでも使いやすい IoT クラウドプラットフォーム	Fracture	西 敬祐（京都産業大学 大学院）、上東 亜佑稀（大阪電気通信大学 大学院）、安田 和麿（京都産業大学 大学院）

表 1　プロコン結果一覧

– 独創的なアイディアあふれる発表に会場は興味津々

ここで、上位 6 チームの発表内容を簡単に紹介します。

グランプリに輝いた JEC seeds チームは、訪日客の旅行スタイルが、紋切り型の観光旅行から、「迷う」ことを楽しみながら自分だけの発見を得る旅に変化している点に注目。そんな新しいスタイルの旅行をもっと楽しくするツールとして SAKURA STAMP を提案しました。SAKURA STAMP は、スタンプ型の Bluetooth デバイスと専用アプリで構成されます。それらを使い、移動の軌跡を記録する、スタンプを押す動作をすることで気に入った場所

を登録する、移動の軌跡とスタンプした場所をはがきに印刷する、自分と誰かの旅の軌跡を重ねて違いを楽しむ、といったことができます。旅行者の最新ニーズを研究して独自の視点から新しい旅の楽しみ方を提案した点が高く評価されました。

写真 3　グランプリに輝いた JEC seeds チーム

写真 4　第 2 位に選ばれた Innovative JECreators チーム

2 位の Innovative JECreators チームの発表テーマは「社員の栄養バランス、社員食堂の残食を可視化し自然環境を整える『For Green』の開発」です。チームは、栄養バランスが偏りがちな社会人の食生活を改善し、同時に、社会問題化している食品ロスの削減をめざして、社員食堂向けのアプリスイートを開発しました。これには、食事内容から社員の栄養バランスを教える Sunshine（社員向け）、社食の人気メニューや残食量を分析する Ground（会社労務部向け）、残食から生じる CO2 量や海水温度などをサイネージ表示して啓蒙する Ocean（全員向け）の 3 つが含まれます。単なる栄養管理アプリでなく、自然環境への影響も意識しながら、社員が自分の食生活を考える機会を提供する独自性が評価されました。

写真 5　第 3 位に選ばれた Udon_Internet チーム

写真 6　第 4 位に選ばれた DigDog チーム

以下、3 位の Udon_Internet チームは、慢性的に通信速度が大幅低下している寮内 Wi-Fi に手作りのメッシュネットワークを導入する実証実験の模様を報告しました。4 位の

DigDog チームは、Kubernetes と Ruby on Rails を用いたコンテナ貸し出しサービスの実装事例を紹介しました。5 位の九産好いとーよチームは、温度、湿度、気圧、アンモニア、CO2 のセンサを搭載したラズパイで教室内の環境を可視化するシステムを開発しました。6 位の MAT_Nodes チームは、初心者でも費用をかけず手軽にネットワーク対戦ゲームを開発できるよう、Mirror と呼ばれるオープンソースの Unity アセットに対して機能拡張を行いました。

– これが楽しみで…との声も。オープンデイズ名物 BoF

BoF は、軽食やアルコールを片手に、リラックスした雰囲気のなかで、すこし柔らかめのお話を聞いたり、ざっくばらんに意見交換をしたりして楽しむ時間です。そのゆるやかな雰囲気から、普段は聞けない講演者や参加者の本音も飛び出すこともあり、この時間を楽しみに沖縄オープンデイズを訪れるという方もいらっしゃるとか。

写真 7　ゆるやかな雰囲気のなかで自動化の奥義を語る田中氏

写真 8　会場からもざっくばらんに質問やコメントが寄せられる

この日、BoF の演壇には 3 名の方が登壇しました。1 人めは、この方がいないと沖縄オープンデイズの BoF が始まらないといってもよい常連の田中薫氏（株式会社インターネットイニシアティブ）です。例年、自社で進めるネットワーク機器等の自動化について、技術的に深く濃いところを朴訥とした口調で語ってきましたが、今年も「自動化、進みました。」というタイトルで、さらに進化を遂げた自動化の状況や技術的に興味深いポイントを紹介してくれました。

これに続いて、早瀬大祐氏（KDDI 株式会社）が「KDDI で社内技術コミュニティを立ち上げてみた」と題し、社内コミュニティの立ち上げと運営の成功事例を披露しました。コミュニティの立ち上げにあたり早瀬氏は、(1)中期計画への組み入れ、(2)幹部に対する期待値制御、(3)プロモーション活動の徹底、に取り組んだといいます。なかでもユニークなのが「期待値制御」で、幹部の期待が大きくなりすぎると活動しづらくなるため、実態に合っ

た適切な説明や参加者数の定期報告などを行ったそうです。

最後に登壇した渋川浩史氏（株式会社ザ・ウェーブ）は、近年、急速に認知度が上がっているｅスポーツ業界からのメッセージを携えて参加しました。題して「ｅスポーツ業界からのお願い」。その１つとして渋川氏は、沖縄はインターネットの遅延が大きく（50ms 以上）、遅延の小さい県外ユーザとオンラインゲームで対戦すると、もはやゲームにならないことを訴え、その解決に向けてインフラ業界の協力を求めました。

Okinawa Open Days 2019 速報 【Day3】

沖縄オープンデイズは 3 日めに入り、ホール横のホワイエと呼ばれるスペースに協賛各社による展示ブースが設けられ、ノベルティグッズがもらえるスタンプラリーの効果もあってか、ブースに足を止めて話を聞く人の姿が途切れることがありません。

この日、ホールでは 5G 技術とそのユースケースに関する多くの講演（午前と午後）があり人気が予想されます。また、これからの沖縄の交通システムやオープンデータの活用を考える「データベッドフォーラム」（午後）や、沖縄特産の泡盛を楽しみながら若手とベテランが交流する「ほろ酔いセッション」（夜）も見逃せません。ほかに「沖縄県観光 2 次交通オープンデータハッカソン」（午前と午後）も行われ、盛りだくさんの 1 日になりそうです。

– 5G のダイナミックな潮流をひもとく最新の講演がここに

伊藤幸夫（OOL 代表理事）によるウェルカムスピーチと、松永享氏（沖縄県 商工労働部 産業振興統括監）による玉城デニー知事からのメッセージ代読でスタートしたこの日のホールプログラム。これから 12 本の講演が行われ、いまダイナミックに展開する 5G の潮流が紐解かれていきます。

写真 1　基調講演をする中尾氏

写真 2　基調講演をする中村氏

冒頭に登壇した中尾彰宏氏（東京大学）は、基調講演「情報通信におけるオープン化・ソフトウェア化・民主化が可能とするバーティカルからの技術革新」のなかで、通信とあらゆるビジネス分野（バーティカル）との融合が起こる 5G 時代には、情報通信の民主化（免許不要な電波などによりすべての国民が基本的なサービスを行えること）に注目すべきであることを示しました。そして、ローカル 5G（建物や敷地内などに限定して地域の企業や自治体が構築する 5G 通信網）などを使い、ドローンカメラによる高精細イベント映像の配

信、馬主による競走馬の訓練状況や厩舎のモニタリング、カキ養殖いかだの遠隔監視といった、地域課題の解決に取り組んだ事例を紹介しました。

同じく基調講演「Local 5G への期待と不安」を行った中村修氏（慶應義塾大学）は、5G が期待される理由として「専有周波数を使うことによる通信の信頼性」と「自由なアプリケーション開発やサービスの可能性」を挙げました。そして、現状下、ローカル 5G を導入しようとすると、敷地の定義（たとえば公道で分断された敷地や海上での利用）、28GHz 帯の電波の強い直進性、NSA 構成（4G 網の併用を要する構成）などの壁があることを指摘しました。その上で、今後、SA 構成（4G 網が不要な構成）が主流になれば、インフラ未整備地域のインターネットアクセス網など、オープンネットワークの重要なアイテムになるとし、ローカル 5G 活用の要点を示しました。

この日の講演には大手携帯事業者も参加しています。太口努氏（株式会社 NTT ドコモ）による「5G 時代に向けたドコモの取り組みとめざす世界」、古川大介氏（ソフトバンク株式会社）による「5G に向けたソフトバンクの取組み」などの講演では、5G の特徴を分かりやすく提示するプロモ画像を流し「5G Ready」であることを積極的にアピールしていました。

写真 3　海外から招聘された講演者も（写真は Richard Colter 氏）

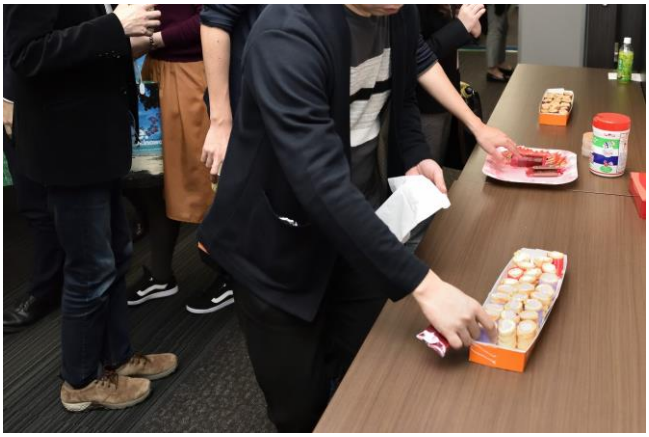

写真 4　もぐもぐタイムにはコーヒーとおやつが提供される

このほか、ネットワークスライスなどを用いた 5G のトラフィック制御技術、オープンソースのマルチベンダオーケストレータである OpenMSA の適用事例、オープンソースによる 5G コアシステム、北米での 5G ディジタルトランスフォーメンションの状況、SD-WAN の標準仕様 MEF3.0 の紹介など、5G とその周辺分野に関する様々な講演が、業界団体、機器ベンダ、大学などから招かれた講演者により行われました。

また、新しい試みとして、今年は講演の合間に「もぐもぐタイム＆ライトニングトーク」の時間が挟まれます。提供される沖縄のお菓子とコーヒーを手に、好きなように休憩や息

抜きをしながら、軽めの話題をリラックスして楽しもうという趣向です。ライトニングトークでは、5G に柔軟性や信頼性をもたらす技術、AI を活用した喜びの検出、デジタルツインの活用事例、電波についてのよもやま話が披露されました。

– MaaS をキーワードに沖縄の交通を議論！ データベッドフォーラム

午後に入ると、ホールでの講演と並行して、201 会議室でデータベッドフォーラムが始まりました。「沖縄では、Google マップなどの世界的な検索サービスに、バスなど公共交通の情報がまったく載っていない、という外国人観光客（年間に約 400 万人前後）の不満の声があった。そこで、OOL が交通事業者や観光事業者と協働し、オープンデータを活用してこの課題を解決することにした」そう語るのはチェアマンである山崎里仁氏（OOL）です。これまでに、石垣島と宮古島では先行的なオープンデータ化（GTFS 形式）が進み、いまはバスや船を含む経路検索を Google マップで行えるようになっているそうです。

写真 5　MaaS の動向を探ろうと集まった参加者たち

写真 6　観光型 MaaS について講演する和田氏

このフォーラムには、名だたる乗り換え情報サービス事業者などからキーパーソンが参加し、MaaS（IT を活用して交通機関の組み合わせや支払いを統合的に取り扱うこと）に関わる分野でのそれぞれの取り組みを紹介しました。具体的には、井上佳国氏（ジョルダン株式会社）が「オープンデータ Hub と MaaS への取り組み」、和田真氏（株式会社 JTB）が「JTB が目指す観光型 MaaS について」、森雄大氏（株式会社ナビタイムジャパン）が「ナビタイムジャパンの MaaS の取り組み」、山口憶人氏（株式会社ヴァル研究所）が「MaaS に最適な経路検索について」と題して講演を行いました。

– 泡盛の女王も駆けつけ盛り上がる、ほろ酔いセッション

講演やフォーラムのプログラムが終わり、日没が近づく時間になると、ほろ酔いセッションが始まりました。ほろ酔いセッションは、沖縄らしいおつまみをほおばりながら、沖縄

のビールや泡盛を楽しんで、参加者同士が苦労をねぎらい交流を図るひとときです。さっそく、あちらこちらに少人数の輪ができ、参加者同士の談笑が始まりました。また会場の一角には、県内で醸造される様々な泡盛を味見できるコーナが設けられ、沖縄県酒造組合が選出する「泡盛の女王」が駆けつけるなか、こちらも人だかりができる盛況ぶりです。

写真７　かけ声に合わせて乾杯！

写真８　「てんぷら」など沖縄らしいおつまみに人気集中

ひとしきりお腹も落ち着いたころになると、プログラムコンテストに参加者した若手メンバがチーム別に登場し、それぞれのプロフィールが紹介されました。司会者から「本人から一言どうぞ」と促され、それぞれ自分の言葉でアピールをする姿には、苦労を乗り越えてきた者の自信がにじんでいました。

Okinawa Open Days 2019 速報 【Day4】

盛況が続く沖縄オープンデイズもいよいよ最終日です。本日ホールでは「沖縄発！データ主導の産業イノベーション」と「データ活用を支える ICT 技術（IoT、AI など）」をテーマとした講演（午前、午後）が行われます。ほかに、IT 社会と呼ばれる時代の人と街のあり方を独自の視点から問いかける講演（午後）や、「沖縄県観光 2 次交通オープンデータハッカソン」の最終プレゼン（午前、午後）もあり、最後まで目が離せません。

– 沖縄から発信するイノベーションが勢ぞろい

この日ホールでは、午前中に「沖縄発！データ主導の産業イノベーション」をテーマとする 4 つの講演が行われました。

山崎里仁（OOL）は「観光 2 次交通強化事業の目指す沖縄の未来」と題して、バスをはじめとする沖縄県内の公共交通のオープンデータ化の取り組み（OTTOP）を紹介し、そこに瀬底幸江氏（沖縄ツーリスト株式会社）と諸星賢治氏（株式会社ヴァル研究所）も加わって、沖縄の交通課題についてのミニ討論を行いました。

写真 1　沖縄の公共交通について討論する瀬底氏と諸星氏（右）

写真 2　講演をする神田氏

続いて、當山弘哲氏（南城市役所）は「南城市の N バスとオープンデータの活用」をテーマに、バスの位置案内、Google マップへのデータ提供など、地域交通の利用促進に向けた南城市の取り組みを紹介しました。「オープンデータが生み出す公共交通の未来」と題して講演した神田佑亮氏（呉工業高等専門学校）は、2018 年 7 月の西日本豪雨の被害でバスや鉄道が臨時ダイヤ運行を強いられた際、被災時の交通情報提供はどうあるべきか模索した経験や、それを踏まえたオープンデータ活用のあり方を示しました。柴崎貴史氏（一般財団法人 沖縄 IT イノベーション戦略センター）はすこし異なる視点から、「リゾートとして

の価値の向上」と「地域社会の利便性や豊かさの向上」に IT を積極活用することをコンセプトにした「ResorTech Okinawa おきなわ国際 IT 見本市」を紹介しました。

– エキサイティングな最新テクノロジーを実力者たちが語る

午後からは「データ活用を支える ICT 技術（IoT、AI など）」のテーマで、だいぶ技術に寄った内容の 6 つの講演が行われました。

Linux Foundation のフェローでもある江藤圭也氏（富士通株式会社）は「レガシーが語るオープンソースイノベーションの現実」と題して講演。そのなかで、開発コミュニティとの関係性などを含め OSS 利用の難しさを明かし、「好きこそものの上手なれ」こそ開発を成功に導く才能を育てる秘訣と力説しました。「デジタルツインコンピューティング」をテーマに講演した薮下浩子氏（日本電信電話株式会社）は、デジタルツイン（現実空間の物や人やそれらの相互作用をサイバー空間に投射したもの）を用いて行うコンピューティングの概念や構想を紹介しました。また、坂本諒太（TIS 株式会社/OOL）と安座間勇二（NEC ソリューションイノベータ株式会社/OOL）は「IoT プラットフォーム FIWARE における FaaS の活用に向けた取り組み」と題して、Apache OpenWhisk を用いた FIWARE へのイベントドリブン機構の実装を報告しました。

写真 3　講演をする江藤氏

写真 4　講演をする薮下氏

さらに、宮本達史氏（KDDI 株式会社）は「AI/ML 技術を用いた運用自動化技術の取組み紹介」として通信システムの保守運用への AI や機械学習の適用事例を紹介しました。鄒曉明氏（株式会社ドヴァ）は「RPA 開発者視点から見た RPA ロボットの信頼性」をテーマに、RPA システムの動作安定性を開発者の視点から取り上げました。また関谷勇司氏（東京大学/一般社団法人 高度 IT アーキテクト育成協議会）は「ソフトウェア時代の IT インフラ人材とは」と題して、近年の技術動向において求められる人材のスキルと AITAC における育成活動を報告しました。

このほかに、もぐもぐタイムのライトニングトークとして、革新的 AI 統合基盤技術研究開発プロジェクト紹介、5G ネットワークのモニタリングコンセプト、保守運用システムへの FPGA 活用事例などが披露されました。

– オープンデータハッカソンの結果やいかに？！

午後 4 時からは、ほかのプログラムと並行して開催されていた沖縄県観光 2 次交通オープンデータハッカソンの表彰式が行われました。独創賞には「バスコレ」（バス停のコレクションを楽しむアプリ）、将来性賞には「スマートバスなび」（AI とチャットを活用したバスナビゲーション）、有用賞には「空き時間活用アプリ」（観光の空き時間にオススメの場所と行き方を提示）、すぐに使えるで賞には「My 時刻表（わん時刻表）」（自分が使う路線だけを抜き出した時刻表を印刷する）と「イベント対応バスなび」（イベント情報や交通手段を教えてくれるバスナビゲーション）が、それぞれ選ばれ表彰されました。

写真 5　独創賞に輝いたバスコレ開発チーム

写真 6　将来性賞を受賞したスマートバスなび開発チーム

※記述者注：当日の司会進行では、表彰式冒頭で発表された受賞テーマ名に「イベント対応バスなび」が含まれていませんでしたが、その直後に行われた、チーム別のトロフィー授与の際には、上記記述の順に発表されるなかで、「My 時刻表」に続いて「イベント対応バスなび」も表彰されたことから、同じく「すぐに使えるで賞」として記述しました。

– IT 社会を“グランドレベル”から見てみると

201 会議室では午後から「グランドレベルで始めよう ～ IT はあなたの孤独を救えるか ～」と題した講演が行われました。登壇したのは、人々が自由で幸せになれる街のあり方を提唱する田中元子氏（株式会社グランドレベル）です。

写真 7　若いお母さんも参加してなごやかな雰囲気に

写真 8　身振り手振りを交え分かりやすく講演をする田中氏

田中氏は、人々が暮らす街のグランドレベル（1 階部分）を「パブリックとプライベートの交差点」と位置づけ、その善し悪しで、人が幸せと思えるか寂しいと感じるかが決まると説きます。そして、グランドレベルがよい街には、人々の居場所があり、お互いゆるやかに関わり合えるという田中氏。その考えの下、まるで私設の公民館のような「年代を問わず健康でいられ、人々が能動性を発露する場所」として立ち上げた喫茶ランドリーは、カフェのような、コミュニティスペースのような、家事室のような不思議な空間で、そこを自分の居場所のように感じて多くの人々が集まるそうです。

そんな場面で大切なのが「補助線のデザイン」だと田中氏はいいます。真っ白な画用紙に描けといわれると困るが、下絵や補助線があると描きやすい。つまり、手がかりがあることで人は生き生きできる。そんな人間心理まで考慮しながら、魅力的なグランドレベル作りを続ける田中氏の講演に、現役エンジニアから赤ちゃんを抱いた若いお母さんまで、幅広い層の聴衆が耳を傾けました。

のべ 1000 人を超える人々が訪れた沖縄オープンデイズは、このようにしてすべてのプログラムを終え閉幕しました。では、また来年お目にかかりましょう。